

■ 論 文 ■

熊本・河原町「国際繊維街」の社会史 －闇市から問屋街、そしてアートの街へ－

島 村 恭 則
(関西学院大学社会学部教授)

■ 要 旨 ■ 本稿は、日本の地方都市の一つである熊本市をフィールドに、地方の在日朝鮮人の生活世界をめぐる社会史について記述・分析するものである。熊本市においては、敗戦直後に形成された闇市起源の市場街に比較的多くの在日朝鮮人の居住が見られた。ただし、そこでは、大阪や東京、あるいは川崎や京都などに見られるような在日朝鮮人中心のコミュニティは形成されず、在日朝鮮人、華僑、沖縄出身者、引揚者を含む日本人等からなる「国際市場」という地域社会が形成されていた。

また、この市場街は、ある時期から繊維問屋街に特化したものとなっており、おそらくそうしたこともあって、在日朝鮮人の存在が焼肉店の出現やコリアタウンの形成に結びつくことはなかった。

このような事例をふまえると、日本列島には、大阪や東京、川崎や京都といった都市で展開されてきた在日朝鮮人の生活世界とは異なる、もう一つの（いくつもの）在日朝鮮人の生活世界が存在することが理解できよう。今後は、他の地方都市の状況も視野に入れながら、「複数の在日朝鮮人史／誌」を描き出すことが課題となる。

■ キーワード ■ 在日朝鮮人、熊本市、闇市、国際市場、繊維問屋、河原町

近年、在日朝鮮人¹⁾をめぐるのは、多くの研究が蓄積されており、その中には、在日朝鮮人の居住する地域社会で、そこに展開される生活世界についての現地調査を行なったものも少なからず見られるようになってきている²⁾。

しかしながら、それらの現地調査は、大阪（生野区）、東京（荒川区ほか）など、「よく知られた」在日朝鮮人集住地域を対象としたものが大部分であり、地方における在日朝鮮人の生活世界についてはほとんど取り上げられることがない³⁾。

筆者は、15年前から、研究の空白地帯であった地方における在日朝鮮人の生活世界について現地調査を行ない、その成果を民俗誌（エスノグラフィ）にまとめる作業を続けてきたが⁴⁾、その過

1) 本稿で「在日朝鮮人」とは、朝鮮半島に対する日本の植民地支配を直接・間接の要因として日本に移住し定着した朝鮮半島出身者およびその子孫のことをさすものとする。

2) 在日朝鮮人をめぐる研究史については、島村（2010）を参照。

3) 例外的なものとして、社会学者の川端浩平（2010、2012）が行なっている岡山市でのすぐれた調査がある。

4) これらの調査は、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 B）「在日朝鮮半島系住民の地方地域社会と」

程で、地方の地域社会では大阪や東京とは異なる在日朝鮮人の生活世界のあり方が展開されていることが明確になってきた（島村 2000、島村 2001 a、島村 2001 b、島村 2002、島村 2003 a、島村 2005、島村 2010）。

以下、本稿では、こうした筆者の地方調査の成果の中から、近年実施した熊本市での調査の結果について、記述と分析を行なうものである。

1. 長六の闇市「国際市場」

戦時中、熊本市には、陸軍健軍飛行場や三菱重工業熊本航空機製作所をはじめ、軍事関係の施設・工場が多く、それらの建設工事や工場労働に徴用された朝鮮人が多数いた。また近隣の市町村にも、鉱山や各種工事現場などに徴用された朝鮮人が暮らしていた。日本が敗戦を迎えると、彼らは朝鮮半島への帰還等のために移動を開始するが、その過程で熊本市内の闇市への流入があった。

闇市とは、戦時下および敗戦直後の統制経済下で、統制を逸脱して物資の売買を行なう自由市場のことであり、熊本市内では辛島町や熊本駅前、および河原町などに規模の大きいものが発生した。

河原町の闇市は、付近に白川にかかる長六橋があったことから「長六の闇市」と呼ばれた。本稿の記述対象である河原町の「国際市場」「国際繊維街」は、この長六の闇市を発祥とするマーケットである。この場所になぜ闇市が形成されたのか。それは、ここが市街地と近郊の川尻とを結ぶ通称「川尻電車」（1927 年全線開通、1965 年廃止）の市街地側起終点（河原町駅）であり、市内電車と川尻電車の接続乗り換え点であったために、人の動きがさかんだったことによる。

闇市では、農村部から担ぎ屋が持ち込む食料品や、健軍周辺にあった在日朝鮮人集住地区等でつくられた密造焼酎、旧軍から持ち出された貯蔵物資や米軍からの横流し品、あるいは一般人が闇市に持ち込んだ衣類その他、さまざまなルートで入手された物資が売買されていた。

闇市の担い手は、前述のように朝鮮人も多かったが、それ以外に沖縄出身者や日本人戦災被災者、満洲等からの日本人引揚者、華僑もいた。その正確な数字は不明だが、現時点での複数の関係者の回想を整理すると、およそ3分の1が在日朝鮮人、同じく3分の1が日本人、残りの3分の1は、沖縄出身者と華僑がそれぞれ半数を占めていた、というような状況だったようである。

この場合、沖縄出身者が一定数存在していた理由は、在日朝鮮人の場合と同様、戦時中に、三菱重工の工場労働者等としてやってきて敗戦を迎え、闇市に流入したケースが多く、また疎開のために沖縄から熊本県内に移動してきていて、やはり闇市に流入したというケースも少なくなかった（以下、とくに文献等の注記がない場合の事実記述は、すべて筆者による現地関係者からの聞き取りによる）。

ㄴ の相互関係、ネットワークと流動性に関する研究」（研究代表者：岡田浩樹、2003-2005 年度）、文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 B）「地方をフィールドとした朝鮮半島系住民のネットワークと生活世界の多声性に関する研究」（研究代表者：島村恭則、2007-2010 年度）、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 B）「東アジアにおけるコリアン・ネットワークの人類学的研究」（研究代表者：朝倉敏夫、2009-2012 年度）、関西学院大学先端社会研究所共同研究「共生・移動」（2010-2011 年度）の各プロジェクトに参加することによって実施してきた。

華僑の場合は、戦前から長崎や佐賀、あるいは熊本に呉服行商人等として多数が暮らしており、かれらが闇市での商売に流入したケースが多かった。日本人は、熊本その他九州、西日本の都市で戦災にあった者、満洲等から引揚げてきて熊本市内に流入した者などである。ただし、在日朝鮮人、沖縄出身者、華僑、日本人いずれの場合も、上記以外に、何らかの事情で他都市から流入した人々も一定数存在した。

たとえば、熊本で衣料品関係の間屋、貿易商として成功した在日朝鮮人の A 氏（1926 年、朝鮮・大邱生まれ）は、18 歳のときに軍属として渡日し、兵庫県川西市の軍需工場の物資を運搬する「阪神トラック会社」で働いていた。敗戦後、朝鮮半島帰還を考えたが、上司の航空大尉から、いま帰っても社会が混乱しているからしばらくこのままこの会社で働かないかと誘われて残留。ただし、少年時代から商売への憧れのあった A 氏は、敗戦から 1 年半のあいだ同社に勤めた後、給料を元手に間屋をはじめた。九州各地の農村で米を仕入れ大阪で売っていたが、あるとき、熊本の軍施設に生ゴムがたくさん貯蔵されていることを知った。A 氏は、それを入手して神戸の長田へ運び、ゴムタイヤの工場（経営者の 8 割は在日朝鮮人だった）でタイヤにしてもらい、再び国鉄の貨物列車で熊本へ送った。そして、これを熊本の農村部に持って行って売った。当時、自転車やリヤカーのタイヤが不足しており需要はたくさんあった。タイヤは米と物々交換し、再度、熊本から生ゴムを神戸へ送るとともに米は大阪で売った。こういう仕事を 3 人の朝鮮人を雇って数年間行なったが、そのあと「長六の闇市」に参入し、大阪から繊維、毛糸、雑貨を仕入れて卸売商をはじめた。そして、熊本の日本人と結婚もし、最終的に熊本に定着することになったが、その理由は、「熊本の水があっていたから」、「肥後もっこす（肥後人が持つとされる、正義感が強くて頑固な性質をさすことば）の気風が自分にあっていてから」と語っている。

さて、形成当初の闇市は、露店で、りんご箱を一つおいたような状態での商売であったが、しばらくすると廃材を用いたバラック建築の店舗が形成されるようになった。そして、1949 年以後、物資の統制解除が進む中で、「長六の闇市」は、闇市ではなく、一般の市場としての態様を見せるようになっていった。そして、その頃（1950 年頃）から、「長六の闇市」は、「国際市場」とか「国際マーケット」と呼ばれるようになった。ここで「国際」というのは、朝鮮人、華僑、沖縄出身者、引揚者等を含む日本人が混在して市場を形成していることから誰となく呼び始めた名前とのことである。

1950 年代の「国際市場」の店舗数はおよそ 300 で、そのうち 100 軒が衣料品（繊維）関係、残りの 200 軒が食堂や食料品店等であった。とくに 1951 年頃は、「糸偏景気」の時代であり、全国的に繊維製品の需要が増加していた。「国際市場」も例外ではなく、繊維関係の店の数が増加している。どの店も間口 1 間、3 坪程度のバラックづくりであった。図 1 は、1957 年当時の住宅地図である。小さな店舗が密集していることがわかる。

ここで、当時の状況を語った、スーパーマーケットチェーン「ニコニコ堂」の創業者、林康治氏の回想記を紹介しよう。林氏は、1930 年に鳥取県境港で生まれた。両親は中国福建省出身で大正末期に渡日して呉服行商を行っていた。林氏が 2 歳のときに母方の親族を頼って一家で熊本へ移住。戦後、林氏は神戸三宮と熊本との間の担ぎ屋商売などを行なった後、1952 年に「長六の闇市」に店を出した。



図1 「国際市場」時代の住宅地図（1957年、『熊本市住宅案内図』住宅詳細案内図刊行会）。川沿いに一列に並んだ店舗群以外は、すべて「国際市場」である。

長六橋際にあったヤミ市の国際市場に店を借りました。広さが一坪余りあったでしょうか。屋根はルーフィングの薄い板一枚。びっしり密集しているので、風が通らない。夏のあの蒸し殺されるような暑さは今も忘れることができません。

店を借りたものの何を商うか。土地勘のある大阪へ出掛け、問屋街をぐるぐる回ったんです。そして目についたのがセーターでした。絶対に成功するためにはどうするか。十円安く仕入れて、十円安く売ろうと決心しました。（中略）それを国際市場で売ったんです。たった十円ですが、店の前にはお客さんの行列ができました。二年目には売り上げは市場で一番。広さも十坪ほどに広がりました。年商は五千万円。本当によく売れました。わたしの商売人生の中で一番売れたという実感があったのもこのころです。（林 1996：30-32）

「国際市場」の盛況ぶりは、熊本で一二を争うほどだったというが、ここはまた「国際市場」らしく、「租界」のような場所だったともいわれている。

終戦直後は、中国人も朝鮮人も戦勝国民という意識があった。まあ、朝鮮人のほうは、戦勝

国ではなく解放されただけというのはあったんだけど、それでも戦勝国意識はあったよ。で、このへんは租界地的な面があった。税務署も、一步引いていた。一軒一軒には税をかけず、組合が一括して納税していた。国際市場には治外法権的なところがあった。税務署が一軒一軒に税金をかけるようになったのは昭和 34 年頃から。その頃には戦勝国とか何とかも言わなくなっていたし。(当地で現在まで繊維問屋を営む在日朝鮮人の男性談)。

こうした語りからも、「国際市場」が在日朝鮮人、華僑、それに沖縄出身者や日本人が入り乱れて商売に邁進していた状況が想像できよう。

ところで、1958 年、この「国際市場」で大事件が起こる。同年 3 月 4 日、熊本で戦後最大の火災といわれた「長六の大火」が発生したのである。『熊本市史』によると、同日午後 7 時 40 分、河原町 2 丁目の「国際市場」の店舗から出火。全焼 60 棟、半焼 1 棟、部分焼 18 棟、負傷者 24 名、消失面積 2813 平方メートル、被災者は 800 人を超えた(新熊本市史編纂委員会編 1997: 935)。

この火災によって「国際市場」は、壊滅状態となったのである。

2. 河原町「国際繊維街」

「国際市場」の人々は、火災前から、同業者組合として「国際商工組合」を組織していた。火災後、組合は市場の再建に立ち上がった。焼け跡に、鉄筋 2 階建てのビルを建て、市場を再興しようとする計画を立てた。組合員がそれぞれ出資して工事が始まり、突貫工事で 9 月にはビルが完成した。ビルの 1 階は店舗で、1 戸あたり 3 坪で 52 戸分が用意された。また各店舗の 2 階は 6 畳 1 間の住宅であった(写真 1、2、3)。

ところで、このビルの基礎工事中、地中から墓石がたくさん出てきた。実は、「国際市場」の土地は、付近の寺院の境内地(墓地)であり、戦後、空襲で焼け跡になっていたところを占拠する形で闇市が形成されていたのである。

土地の所有関係については、火災発生の頃までは寺院側もある種の黙認状態にあったらしいといわれているが、ビル建設が計画されるのを機に商工組合は寺院側と交渉。市場の土地を寺院側から



写真 1 「長六の大火」後に建てられた店舗兼住宅用ビル



写真 2 店舗兼住宅用ビルの内部



写真3 店舗兼住宅用ビルの内部（2階から撮影。2階部分が6畳の居住用スペース）



写真4 「国際繊維入口」の看板

購入することになり、ビルに入居する組合員が区分所有者として土地を入手することができた。

なお、この後、このビルと道を隔てた寺院側の土地（寺院所有）には、寺院自らがビルを建て商店を入居させている。また、さらに別の地主がやはり市場用のビルを付近に建てて商店を入居させた。その結果、組合が建てたビルに加え、寺院や他の地主が建てたビルなどが複合して、一つの市場空間が構成されるに至った。

ところで、新生の「国際市場」に入った店舗は、ほとんどが繊維を扱う店であり、しかもそれは小売店ではなく、問屋であった。つまり、新生「国際市場」は、繊維問屋街であった。新生後も市場は、「国際市場」の名で呼ばれていたが、同時にこの頃から看板等には、「国際繊維街」「国際繊維」などという表記もなされるようになっていく（写真4）。

ところで、新生の「国際市場」に入った店舗は、ほとんどが繊維を扱う店であり、しかもそれは小売店ではなく、問屋であった。つまり、新生「国際市場」は、繊維問屋街であった。新生後も市場は、「国際市場」の名で呼ばれていたが、同時にこの頃から看板等には、「国際繊維街」「国際繊維」などという表記もなされるようになっていく（写真4）。

なお、同地に小売店ではなく問屋が多い傾向は、火災前の「国際市場」でもすでに見られた。この場所が、国鉄熊本駅にも近いことから、熊本県内や鹿児島県等各地からの行商人や小売商に対する商品の卸売りに向いていたからである。

ところで、熊本市には、繊維を扱う問屋街がもう一か所ある。唐人町である。河原町にほど近いところにある唐人町は、戦前からの問屋街で、衣類や雑貨が扱われてきた。しかしながら、空襲の被災はなかったものの、戦後は、物資不足で商売が成り立たず、再起に時間がかかっていた。「長六の闇市」のほうは、まさに焼け跡に発生した闇市であり、また商品も闇物資ゆえに豊富にあったが、唐人町のほうは、闇物資を扱わず、商売がなかなか成立しなかったのである。

ただし、このように敗戦直後では、新発生の闇問屋街「国際市場」の勢いが圧倒的に強かったが、経済が安定し、物資が出回るようになると唐人町のほうが力を盛り返してきた。こうして、1950年代中盤以降は、伝統的な問屋街である唐人町と、闇市から発展した「国際繊維街」とが力関係においてほぼ同じか、あるいは唐人町のほうがリードする、というような状況に転じている。

伝統的な問屋街と闇市起源の新興問屋街との二元的存立は、大阪でも見られる。すなわち、戦前からの船場の問屋街に対して、日本人引揚者や戦災被災者、在日朝鮮人らによって梅田駅前に形成された闇市を起源とする梅田繊維問屋街（1969年に新大阪へ移転し、新大阪センシティとなる）

の二元的存立がそれである。同様の状況は、さらに他都市にも見出せる可能性がある。

次に、「国際繊維街」の一角で現在も店を出している B 氏（韓国・忠清北道生まれの在日朝鮮人、80 代、男性）と C 氏（日本人、80 代、女性）の語りから、「国際繊維街」での商売の様子を再現してみよう。

[B 氏]

敗戦直後、少年であった B 氏は闇市で働き、その後、1958 年に新生のビルに店舗を設けて独立した。当初は古着の鑑札を取得して古着を扱っていたが、やがて新品を販売するようになった。仕入れ先は、大阪や岐阜、一宮、岡崎、蒲郡、浜松、西脇、福山（備後餅）、久留米（久留米餅）などであった。仕入れた品物は、別送すると 3～4 日かかり効率が悪いので、自分で仕入れに行つて商品を風呂敷に詰めて持ち帰った。夜行列車で熊本に戻ると、すぐにとんぼ返りで仕入れ先へ。とにかく当時は商品を店に置けばすぐに売れた。昭和 20 年代後半から昭和 30 年代後半まで、繊維関係は何でも売れた。顧客は、行商人や小売店で、県内のほか、鹿児島、大分、宮崎などからもやってきた。鹿児島や長崎にも問屋はあったが、ここに比べればそれらは小さかった。

[C 氏]

岡山県倉敷市出身の C 氏は、倉敷市内で夫とともに学生服や作業服の製造業を営み、「国際市場」の問屋に商品を卸していたが、「長六の大火」によって顧客からの集金ができなくなり、C 氏の工場の経営も難しくなった。そのため、思い切って自ら「国際市場」で店を営むことにし、新生の「国際繊維街」に学生服などを扱う衣料品問屋を出店。当初は、1 軒分のスペースで出発したが、その後、近隣の店舗も買い取って、最終的には 4 戸分のスペースで店を構えた。

店の最盛期は 1968 年で、当時は常雇の社員 10 人とアルバイト 10 人を雇っていた。この頃は、次から次へと産地からダンボールで商品が送られてきて、それをアルバイトが次から次へと開けて陳列すると、すぐに売れていくという状態だった。その年の売り上げは、学生服 6000 着、背広 300 着であった。また、この頃は、競売をするのに、競売場というのがあり、隣の寺の本堂を借りてそれを行っていた。

店の客のほとんどが行商人（男女ともにいた）で、天草、水俣、鹿児島方面から多く来た。かれらは朝早く汽車で熊本駅に着き、ここへ直行する。そして大量に仕入れをし、持ち帰れないものは日通で別送して帰っていった。C 氏の店では、仕入れは産地に直接出向いて行なった。学生服と作業服は岡山、メリヤス系は大阪、デザインものやジャンパーは岐阜が産地であり、品目ごとにそれぞれの産地へでかけた。店によっては、岡山でつくられた学生服も大阪の問屋で仕入れるというように、一ヶ所の問屋で仕入れをまとめて行なうところもあったが、そうすると店での売値が高くなってしまふ。これに対して、あちこち行くのは大変だったが、C 氏のところでは夫が産地へ直接買出しに行っていた。

この街は、C 氏のような日本人とともに、在日朝鮮人や華僑、沖縄の人たちも商売をしていたが、住人の間に差別はなかったという。「韓国の人も中国の人も沖縄の人も、みんな一緒だった。日本人と韓国人とで子供同士が結婚した家もある。そもそもここで暮らしている限り、何人とかい

うことは考えなかった」(C氏)。

さて、C氏の語りにもあるように、「国際繊維街」の繁盛のピークは、1960年代後半だったようである。そしてその後も、安定した経営が続いていた。しかし、1970年代のオイルショックの後から売り上げが落ちはじめ、バブル経済崩壊後の1990年には店舗数が40にまで減少した。ちょうど1990年前後から、熊本でも大型スーパー、量販店の進出があった。その影響で小売店や行商人が立ち行かなくなり、そうなるとう当然、問屋でも商品が売れなくなる。こうした連鎖現象が起こって、「国際繊維街」の問屋の中にも店を閉じるところが出てきたのである。2008年現在、営業している繊維問屋は10軒のみとなっている。

3. アートの街へ

衰退の一途をたどった「国際繊維街」であったが、2000年代に入って新たな動きが生まれた。熊本市の企画会社社長、前崎弥生氏が、「国際繊維街」を「アートの街」として再生させることを発案。繊維街のビルの区分所有者に店舗スペースの賃貸を交渉した。その結果、空き店舗の所有者らが、1店舗あたり1ヶ月15000円から25000円でスペースを貸すことになり、前崎氏らの斡旋で



写真5 「クリエイター町 河原町問屋街」の看板



写真6 「河原町アートの日」のポスター



写真7 新たに开店したギャラリー・カフェ

若いクリエイターや起業家が店舗を借りることになった。最初の出店は、2003年春のアクセサリーショップであり、その後、アトリエやギャラリー、衣類の店、飲食店等がこれに続いた。こうして新たに入居した店舗の数は、2008年段階で約20である（写真5、6、7）。

現在、新来者の自治組織として「河原町文化研究所」（2004年設立）が組織され、イベントの企画や街の広報を行なっている。定期的なイベントとしては、毎月、第2日曜日が「河原町アートの日」とされ、インスタレーション展示やパフォーマンス、古物市などが行なわれている。

熊本市のまちおこし団体、「城下町『和 samon』もてなし隊」が作成したパンフレット（2008年版）によると、「アートの街」としての河原町は次のように説明されている。

昭和レトロがここに。河原町商店街。

なぜか懐かしい。どこか新しい。よくある街の商店街……

だったはずが、若手クリエイターが集まる新スポットへ。

昔問屋街だったアーケードに雑貨、ギャラリー、アトリエ、事務所……などなど個性豊かなお店が軒をつらねる。河原町を舞台に、若手クリエイターが挑戦している姿は、映画のワンシーンのよう。

壊さなくていいんです。昔ながらの商店街のまま、新しい風をつくれば。

街並みに惹かれて店を開いたのは3年前。徐々に若者が集まり、今ではギャラリーや喫茶店、着物屋などが並ぶ新名所に。互いに刺激しあい街を盛り上げています。昔からの商店街ファンも初めてきた人もその熱気が伝わるのか、とてもよろこんでくれますよ。

こうした動きに対して、「国際繊維街」で古くから店を出している人々の反応は、概ね好意的なようである。ある店主は、「自分たちはファッションを扱ってきた。新しいもの、流行に抵抗はない。もともと「国際市場」って言ってたくらいだから、この街はいろんな人間を受け容れられる。それに、この街は所有権が入り組んでおり、街全体を再開発するのは難しい。ならば、ここでこうして新たな街づくりができるなら、これはいいことではないか。店舗の賃貸も、大きな物件ではないので気軽に貸したり借りたりできる。空き店舗を死なせておくより断然いい」と筆者に語っている。

なお、「アートの街」としての河原町は、2003年度「全国都市再生モデル調査」（内閣官房都市再生本部）の調査対象に全国171地点の一つとして選定されている（調査実施主体は「熊本まちなみトラスト」）。

結び

以上、地方都市熊本において形成された闇市起源の市場街について概況を眺めてきた。そこには、在日朝鮮人の一定数の集住が見られたが、ただし、大阪や東京、あるいは川崎や京都などに見

られるような在日朝鮮人中心のコミュニティは形成されず、在日朝鮮人、華僑、沖縄出身者、引揚者を含む日本人等からなる「国際市場」という地域社会が形成されていた。

また、この市場街は、ある時期から繊維問屋に特化したものとなっており、おそらくそうしたこともあって、在日朝鮮人の存在が焼肉店の出現やコリアタウンの形成に結びつくことはなかった。

このような事例をふまえると、日本列島には、大阪や東京、川崎や京都といった都市で展開されてきた在日朝鮮人の生活世界とは異なる、もう一つの（あるいは、いくつもの）在日朝鮮人の生活世界が存在することが理解できよう。今後は、他の地方都市の状況も視野に入れながら、「複数の在日朝鮮人史／誌」を描き出すことへと向かいたい。

謝辞

熊本市での調査では、次の方々をはじめ、多くの方々のお世話になった。記して謝意を申し上げる。安秉玟、金聖孝（在日大韓基督教熊本教会）、中島孝行、松村博の各氏。

【参考文献】

川端浩平

2010 「岡山在日物語－地方都市で生活する在日三世の恋愛・結婚をめぐる経験から－」岩渕功一編『多文化社会の〈文化〉を問う－共生／コミュニティ／メディア－』青弓社。

2012 「二重の不可視化と日常の実践－非集住の環境で生活する在日コリアンのフィールドワークから－」『社会学評論』250。

島村恭則

2000 「境界都市の民俗誌－下関の〈在日コリアン〉たち－」『歴博』103。

2001 a 「『日本民俗学』から多文化主義民俗学へ」『近代日本の他者像と自画像』、篠原徹編著、柏書房。

2001 b 「〈在日朝鮮人〉の民俗誌」『国立歴史民俗博物館研究報告』91。

2002 「在日朝鮮半島系住民の生業と環境－ポッターリチャンサ（担ぎ屋）の事例をめぐって－」『民具マンスリー』35-1。

2003 a 「境界都市の民俗学－下関の朝鮮半島系住民たち－」『越境』（現代民俗誌の地平 4）、篠原徹編著、朝倉書店。

2003 b 「在日韓国・朝鮮人」『歴史学事典』10（身分と共同体）、尾形勇責任編集、弘文堂。

2005 「朝鮮半島系住民集住地域の都市民俗誌－福岡市博多区・東区の事例から－」『国立歴史民俗博物館研究報告』124。

2010 『〈生きる方法〉の民俗誌－朝鮮系住民集住地域の民俗学的研究－』関西学院大学出版会。

新熊本市史編纂委員会編

1997 『新熊本市史』通史編 8、現代 1、熊本市。

林 康治

1996 『報恩感謝』熊本日日新聞社。

The Black-market, Textile Wholesale District, and City of Art :
A Social History of ‘the International Textile District’ in Kawara-machi, Kumamoto

SHIMAMURA, Takanori

Abstract

This paper attempts to illuminate and analyze the social history about everyday lives of Zainichi Koreans in regional cities of Japan based on the fieldwork research in Kumamoto City. There were relatively large numbers of Korean residencies along the market area of which originated from the black-market built immediately after the World War II. Unlike Osaka and Tokyo, or Kawasaki and Kyoto, it did not create the ethnic enclaves of Zainichi Koreans. Rather, there were Chinese, Okinawans, and Japanese including repatriates from colonies as well as Zainichi Koreans, and created the diversified local community characterized by the ‘international market.’ In addition, this market area eventually became the textile wholesale district. As the consequence, the relatively large numbers of Korean residencies did not create the Korean towns or other ethnic businesses represent Koreans such as Korean BBQ restaurants. When we focus on these local case studies, they illuminate alternative aspects to understand everyday lives of Zainichi Koreans which are different from previous studies focused on the highly concentrated areas in the urban locations. As it attempted in this paper, it is important to examine these local case studies to depict the ‘plural histories and ethnographies of Zainichi Koreans’ for the future studies.

Key words: Zainichi Koreans, Kumamoto City, Black-market, International-market, Textile wholesale district